汽船の中の父と子

小川未明

青空文庫

古い、小形の汽船に乗って、海の上をどこということなく、東に、西に、さすらいながら、珍しい石や、貝がらなどを探していた父子の二人がありました。

あるときは、北の寒いところで、名もない小さな島に上がって、珍しい青い石を探したこともあります。また、あるときは、南の熱い太陽の赤々と照らす、真下のところで、赤い石を掘ったこともありました。

二人は、珍しいものが手にはいると、いろいろな国の都へ、どことはかぎらずに、船の便宜によって上陸しました。そして、にぎやかな街の中を歩いて、それを貴族に売ったり、金持ちに莫大な金で売りつけたり、また商人に譲ったりしたのであります。

父と子といっても、すべて、父親一人の力でありました。男の子は、まだ、それほど年がいかなくて、ただ、父親のゆくところへは、どこへでもついて歩いてゆくばかりであったからです。

父親は、気むずかしい顔をして、髪をのばしていました。青い月の光が、水のように美しく、華やかな、にぎやかな街のかわら屋根に流れる夜、その街を歩いて、その日は、珍しい石を高く売りつけたので、とある酒場にはいって、たくさんなごちそうを食べたりしたこともあります。そんなとき、子供は、その店で鳴らしている楽器の音を、どんなにか悲しく思ったでありましょう。また、美しい女らの顔や、唇や、そして、白い歯を光らしながら歌った、その土地

土地の古い唄をどんなになつかしく思ったでありましょう。

しかし、そこにいるのも、けっして、長い間ではありませんでした。二人は、また、小さな汽船に帰らなければならなかったからです。

汽船は、二人が陸に上がっていない間は、じっと海の上に、真っ黒な顔をして待っていました。長い間、雨や、風に、さらされたので、汽船がそう汚れて、くろっぽく見えることには、不思議がありませんでした。

「おればかりは、いつも海しか、見ることができないのだ。陸へ上がって、にぎやかな、街を見ることも永久にかなわないのか……。」と、汽船は、不平そうな顔つきをして、いっているようでありました。

父親は、取引がすむと、重そうに金を抱いて、船の中に、子供をつれて帰ってきました。そして、それを金箱の中に、大事にしてしまいました。その箱はがんこに、真っ黒な鉄で造られていました。

父親が、金貨や、銀貨が、だんだん航海するたびにたまってくるのを、うれしそうにながめながら、

「この金貨は、西の国の金貨だ。この金貨は、東の国の金貨だ。この銀貨は、重い。しかしこちらの銀貨のほうは、もっと目方がある。」といっていますのを、子供は、そばで、ただ黙ったまま見ていました。

「お父さん、そんなに、金貨や、銀貨を、たくさんためて、どうするんですか？」と、子供は父親に向かってききました。

「おまえ、街へいってみれ、おもしろいことがたくさんある。きれいなものが、ありあまるほどある。これんばかしの金がなんの役にたつものか。もっと、もっと、金をためなければならない。」と答えました。

子供は、もはや、海の上の航海に飽いていました。なぜなら、青い波と青い空のほかには、なにも見ることができなかったからです。そして、暴風の日は、小さな汽船が、木の葉のように、波の間にひるがえり、灰色の、ものすごい雲が、あたりを包んで、まったく、生きている心地がなかったからでありました。

しかし、父親はまだ航海をやめようとはしませんでした。

ある日のこと、二人は、知らぬ港に船を着けました。そこには、諸国の人々が集まっていまして、珍しい話をしたり、また類のまれな品物などを出し合ったりしてながめていました。なかには、自分の持っている品を、ほかの人の持っている品と交換したりするものもあったのです。

二人は、この港に上がって、ぶらぶらと歩いていました。すると、白いひげをはやしたおじいさんが、石に腰をかけて、銀製のオルゴールを持って、前を通る人をぼんやりとながめていました。

父親は、オルゴールに目をつけて、おじいさんの前にやってきました。そして、どんな音がするのかとたずねたのでした。

おじいさんは、父親の顔を見ながら、

「私は、このオルゴールを、ここから遠い、西の国の村の古道具屋で見つけました。じつに、不思議な音がするので、いままで、多くの人々に譲ってくれと頼まれましたけれど、手放さなかった品です。」と答えました。

「どれ、ひとつ、その音をきかせてもらえまいか。長い間、海の上に暮らしているので、しばらく、いい楽器の音色をきいたことがないから……。」と、父親はいいました。

おじいさんは、オルゴールを鳴らしはじめました。すると、父親は、耳を傾けていました。なんというさびしい、その中にも、明るい感じのする音色でしょう。波の音のような、鳥の鳴く声のような、また風の狂う響きのような、さまざまな音のする間に、いろいろなことが空想されるのでした。

父親は、赤いさんごを採った、南の小さな島を思い出しました。また、青い石を掘った、北の寒い島の景色を思い出しました。また、暴風の日のことなどを思い出しました。かぎりない、海の上の生活を、つぎからつぎへと、記憶に呼び起こしたのであります。

「このオルゴールは、海の唄とでもいうのかな？」と、父親は感心して、たずねました。

おじいさんは、笑って、

「いや、鳥の唄だと、いったものがあります。」と答えたのでした。

「鳥の唄？　なんという鳥であろう。」

父親は、どうしても、その鳥を思い出すことができませんでした。

「なんにしても、まあ、いい。どうか、このオルゴールを譲ってもらいたいものだ。」といって、おじいさんに、頼みました。

「私は、子供の時分から、故郷を出て流浪しています。このごろは、このオルゴールをいい値で買う人を見つけて、もし売れたら、故郷へ帰りたいと思っています。」といいました。

子供は、おじいさんのいうことを聞いて、同情しました。自分が、つねに、美しい草花や、ちょうや、野原に憧れている心持ちを、よく知っていたからであります。

父親は、いくらかの金を出して、そのオルゴールを買いました。しかし、その金は、おじいさんを満足させなかったようです。

「おまえさんは、たくさんお金を持っていなさるようだが、もっと私にくれてもいいのに。」と、おじいさんがいったからです。

しかし、父親は、オルゴールを持つと、さっさと、あちらへいってしまいました。

このとき、白いひげのおじいさんは、石から起き上がって、二人の後ろ姿を見送っていましたが、ふと、思いついて、ポケットにいれてあった鍵をつかみ出すと、父親が忘れていったと知ったので、おじいさんは、すぐに二人の後を追いかけたのです。けれど、二人は、どこへい

ったものか、おじいさんは、見失ってしまいました。

「これがなかったら、あのオルゴールを鳴らすことができん。どんなに困るだろう。」と、おじいさんは独り言をいっていました。

しばらく、おじいさんは、港に立って、二人が気づいて、もどってきはしないかと待っていましたが、ついに、二人はやってこなかったので、おじいさんは、この古い鍵を海の中へ投げ入れて、いずこともなく去ってしまいました。

父親は、汽船に帰ってから、はじめて鍵を忘れてきたことを悟りました。しかし、どうすることもできませんでした。二人は、また、それから航海をつづけました。

北の方の海に、まわってきましたときに、父親は、港に上がって、近くの町へまいりました。そして、ある時計屋へいって、そのオルゴールに合う、鍵を探したのであります。ちょうど、それに合う鍵を見つけました。

船にもどってから、二人は、そのオルゴールを鳴らすことができたのです。

おじいさんは、鳥の唄だといいましたが、まことに、その音は悲しいような、楽しいような、さまざまな心持ちを呼び起こすものでした。

このとき、どこからともなく、あまつばめが、群れをなして飛んできました。そして、船のまわりでしきりに鳴き騒ぎました。

あまつばめは、めったに、こうして騒ぐものではありません。オルゴールの音をきいて、ど

こから飛んできたのでありましょう。すると、たちまち、天気が変わってまいりました。

いままで輝いていた太陽は、隠れてしまい、ものすごい雲がわいて、海の上は、怖ろしい暴風となって、濤は狂ったのであります。ほんとうに、どうしたことか、その中をあまつばめは、船のまわりに、岩角に、集まってしきりに鳴いていました。

とうとうその夜のことです。大波が襲ってきて、船の上のものいっさいを洗いさらってゆきました。そして、このとき、父親の大事にしておいた、鉄で造られた金箱が転がって、海の底深く沈んでしまったのであります。そればかりでなく、小さな汽船は、砂浜の上へ、打ち上げられてしまいました。

夜が明けて、海の上が静まると、もう小さな汽船は、土の中に、半分ほどうずまって、海岸に建てられた小舎のようにしか見られませんでした。

「ああ、もうこの船の寿命も尽きた。私も、航海をやめよう。」と、父親はいいました。

子供は、はじめて、自分の希望がかなって、陸の上の生活が、できるかと思いましたが、さて、自分は、野原へか、街へか、どちらへいって、働いたらいいかと考えたのです。このとき、父親は、子供に向かって、

「私は、おまえに、たくさんな宝を残してやりたいと思ったのが、みんな、いまは、金箱といっしょに海の底に沈んでしまった。もうおまえにやるものがない。ただオルゴール一つだけだ。これをおまえにやるから……。」といいました。

「いいえ、お父さん、私は、なにもいりません。あなたが、海の上でお働きになったように、私はこれから広々とした陸の上で働きます。けれど、私の仕事はけっして、最後に、あの鉄の中の宝のように、形もなく、むだとなってしまうことは、ないであろうと信じます。」

子供は、働くべく、出かけてゆきました。

あとに独り父親は残されました。海辺に横たわった船は、古く朽ちてしまいました。煙突から煙の上がる曇った日に、オルゴールが鳴っています。そして、その船のまわりに、あまつばめの飛んでいる、寂しい景色がながめられたのであります。

――一九二四・七作――

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　4」講談社
　　1977（昭和52）年2月10日第1刷発行
　　1977（昭和52）年C第2刷発行
初出：「赤い鳥」
　　1924（大正13）年9月
※表題は底本では、「汽船《きせん》の中《なか》の父《ちち》と子《こ》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：館野浩美
2017年8月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

汽船の中の父と子

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/